

幼児教育と発達心理学

藤 永 保



心理学から教育へ

日本の心理学の傾向は、私が東大の心理学科を出ました頃とは、非常に変わってきています。私が学生の頃は、実験心理学が盛んな時であり、実験心理学をやっていなければ人間ではないという雰囲気がある東大にあって、教育心理学や子どものことをやるのは、いわば、オーソドックスな世界から脱落した、はしにも棒にもかからない連中だという雰囲気の中で、私は育ったわけです。しかし、最近では、そういう傾向というのは、正に一変したと思います。

現代の心理学者の中で、若い方々の関心の一つの中心は、発達心理学、あるいは、発達と教育の関連を考えることにあると言えます。私は、そういう若い方々の中では比較的年青なので、なん

となくいろいろな場面で代表あつかいをされるのですが、別にそういうことではなくて、若い方々といっしょに研究していきたいと思っています。

私は十三年間、東京女子大の心理学科にいましたが、その研究室のメイン・テーマは発達心理学でした。私自身は、元来、実験心理学の出身であったわけですが、卒業論文では、子どもの記憶の発達ということを研究しました。そんなことで、次第に発達心理学に興味をもつようになったわけです。

後で、くわしく述べますが、私がそういう研究をやりはじめた頃は、発達心理学の傾向というものは、かなり、古典的と言いますか、伝統的なやり方をしていまして、一口に言いますと、たとえば、一歳になるとどの位のことができるだろうかとか、二歳になったら、それがどういうふうに変わるだろうかとか、いわば、木や草が一年たつと、二十センチになり、二年たつと、三十

センチになり、三年たつと四十センチになると、そういうことを測っている段階であつたわけです。学問の発達段階として、そのような段階にあつたのは、やむをえないことですが、次第に、考え方が進んできますと、それだけではなくて発達というのは、一体どういう条件に左右されているのだろうか、望ましい発達というものを、もし仮に人間が早めることができるとしたら、そのために、どういう処置をとつたらよいのだろうか、ということがだんだん考えられるようになって来ました。

そこから、私は、次第に教育ということに関心をもつようになり、お茶の水女子大の教育学科に移ることになったわけですが、

私は女子大学にばかりおりますが、女子教育の専門を志したわけではありません。なんとなく偶然にそうなつたわけですが、考えてみますと、これからの女子教育というのは、非常に大切なことではないかと思つています。女性はなんといつても、人類の半数を占めるわけですから、その中にある才能をひきだすということとは、今後の人類にとって、大切な課題であると思ひます。

同様に、幼児教育というものも、そういう意味で、これから大切な教育の一つの分野になるであろうと考へているわけですが、私にとっては、重要な二つの教育の分野にいつのまにか、かかわりをもつようになったことは、非常に光栄だと思つております。

私の経歴から、おわかりのように、心理学から教育へということ、教育に片足を突っこんだというようなところであり、必ず

しも、私が教育学そのものを学んだとか、教育実践という立場から出発したわけではないのでありまして、その辺の所に、弱点があるわけです。

ある所で、お話をしたのですが、非常にはっきりものを言うあの幼稚園の先生が「中央から学者と称する偉い先生がよく来るけれども、話はみんな抽象的な理論的なことばかりで、現場にいるものは、明日、すぐに役立つものを聞かせてもらいたいと思つているのだ、そんな説教ばかりされても、何の役にも立たない」と言われまして、私などは、全くそのところが弱いと言えます。これから書く内容も、あるいは、幼稚園教育を外側から眺めている人間であるため、見当違いであつたり、すぐ役に立つようなものではないかもしれません。唯、発達心理学が原理的な抽象的なものであつても、日々の教育実践に、いくらかでも拡張して応用できれば、非常に光栄であり、嬉しく思ひます。

これからの教育における幼児教育の位置

最初に、これからの教育において幼児教育の占める位置ということについて、ちょっと、前置きとして、ふれておきたいと思ひます。

幼児教育は、いままではどちらかと言いますと、必ずしも、高い位置を占めてこなかったと言えます。世人の偏見であると言つ

てしまえば、それまでですが、必ずしもオーソドックスな、高度な教育の場とは、みなされていなかったということは、残念ながら、事実であったと思います。

正當な学校教育に入る前の準備段階程度に考えられている場合も多かったのではないかと思います。失礼な言い方であるかもしれませんが、先生方、先生方のほうも、幼稚園の先生になられる方は、子どもが大変好きだから先生になられたという方が非常に多いようです。

私は、「子どもが好きだ」ということは、幼児教育者として、第一の資格だと思っております。そのことが別に悪いと考えているわけではないのです。しかし、子どもが好きだということが幼児教育者として、果たして完全に十分な条件になるのかといえますと、そのところは、そう簡単に割り切れないものがあるのではないかという感想を持っています。

そして、現在のような、幼児教育の見方というものが、将来も果たしてそのままであろうかということについて、少し考えてみたいと思います。

現代は、教育爆発の時代と呼ばれており、世界各国で、教育というものが、これほど大きな地位を占めるようになった時代はないのであります。その背景には、ご承知のように、さまざまなき事情があるわけです。経済水準が上がれば、自然に高い教育水準を求めるといふこと、これは、ごくあたりまえのことだろうと思

います。

逆に言って、生活水準を高めるために、逆に教育水準を高めるということが要求されることがあるわけです。

日本が明治以来こういふふうには、発達したのもある論者に言わせると、義務教育が普及したからだといふようなことになるようですが、世界各国の後進国で、やはり、教育というものは、生活水準を上昇させる尖兵としての役割を持っているため、教育に対する関心が非常に増大しているように思います。あるいはまた、アメリカとソ連との教育競争が非常に激しくなっております。こういうふうなことも教育の爆発を支えている要因ではないかと思ひます。

その他、いろいろあるだろうと思ひますが、私が考えて最も大きな理由というのは、いろいろな技術革新が進んで、オートメーションということが非常に進んでまいりますと、さまざまなき工業というものが、昔は高い価値をもっていたわけですが、機械は、単純労働や手工業の世界から人間を駆逐しまして、だんだん機械が置き換わっていくという時代になってまいります。

あるいは、最近になりますと、コンピューターというものが出てまいりまして、今まで人間だけの領分だと思われていた世界まで機械が置き換わっていくとしています。

ただ、余談であります。私自身は、コンピューターの可能性については、将来、詩をつくったり、ロボットのかわりをしたり

するようになるだろうという非常に樂觀的な意見もあるようですが、コンピューターのはたらしには限界があるのではないかと考えています。

一つの例をあげますと、コンピューターに翻訳をさせるために、学者がアメリカの言葉で、*Out of sight, out of mind* ということわざを使ったのです。これは、文字どおり、見えなくなれば、だんだん忘れてしまうという意味ですが、コンピューターは、「氣違いが泣いている」という答えをうちだしたそうです。

確かに、考えようによっては、*out of mind* というのは、氣違いととれないこともないし、*out of sight* というのは、目が見えないわけですから、涙で目が見えないと解釈することも、できないわけでもありませんが、人間が解釈したら、少なくとも、そういうことは、やらないのではないかと思います。

やっぱり、コンピューターと人間の頭の働きとは、根本的に違うのではないかと、私は思うわけです。

しかし、片方の楽観論もやはり無視できないわけでありまして、こういう時代になりますと、ますます高度ないろいろな人間的能力というものが、生産の場でも、さまざまな技術をつくり出す場でも、要求されてくるようになってくるわけだろうと思えます。

それから先にさらに重大なことは、今までのことは便宜的理由にすぎないわけですが、コンピューターというものが人間の頭脳

のかわりをするといわれますと、私たち心理学者としては、やはり人間はもっと違う、もっと独特な、いわば、人間の尊厳と言いますか、そういう重要な特徴をもっていると考えたくなるわけです。

そして、それが人間の尊厳と申しますか、まさに人間だけしかできない能力で依然として、人間らしい前途を求めていくにはどうしたらよいか、ということを考えなければいけないだろうと思えます。

そのためには、教育の場に、従来よりも、もっと、高度なさまざまな精神的、人間的な能力を養成することが要求されるようになってくるのではないかと、思うわけです。

教育の役割というのは、ますます重要となりますし、幼児教育の方には、より高度な教育がこれから望まれていくことになるだろうと思えます。

目標達成のための二つの方向

それでは、そういう目標を達成するために、どうしたらよいかということがありますが、これも、私は専門ではないのですが素人考えでは、だいたい二つの方法があるように思っています。

第一は、いうまでもなく教育の現代化という方向であります。

今まで、おこなわれてきた伝統的な教育の中から不必要な部分と言いますか、あるいはムダな部分と言いますか、そういうもの

をできるだけだけ省いて、もっと能率のよい、そして現代の科学の発達の第一線に追いついていけるような教育をしたいと、こういう運動を教育の現代化運動と言います。こういう運動はソ連でも、アメリカでも非常に盛んなわけです。

具体的に一例をあげますと、私たちが子どもの頃、算数の中で、鶴亀算とか流水算とか非常に難しい算術をやらされたものですが、私たち、思考心理学をやっている者の目からみると、それらの解き方は、非常に難しいものです。全部を鶴と考えた場合、足は何本あるかという思考法は代数を使う場合の思考法よりも、非常に難しいと思うわけでありますが、昔の教育は、むしろ、そこが逆になっていまして、難しいやり方を先に教え、あとで代数というやさしいやり方を教えることになっていました。現在の教育学者はそこらのところからムダを省くことはできないだろうかとか、代数を先に教えてしまえば、やっかいな複雑な思考法を子どもに要求しなくても、いいじゃないだろうかと考えるわけです。

私たちの子どもの頃も棒暗記のような仕方、鶴亀算を解いたのですけれど、そういうことはやらないで、もっと誰にでも解けるような方法を教えようということがやられています。これは中国、ソ連などでも、やられておりますし、小学校の上級生に代数を教えようというところのみが、立派に成功しているという報告がでている場合もあります。

日本の小学校も、だんだんそういう方向に変わっていくこと

は、すでに知られていることです。

ただし、ここで皮肉なことに、母親の方が子どもに追いついていけなくなるものが起こってきました。アメリカの話ですが、今まで、子どもに教えることによって、威嚇を保っていた母親が、だんだん小学校の算数が難しくなってきたために教えられなくなり、これでは困るといふ声が強くなってきました。そこで、母親や父親を再教育するようなセンターが作られているようですが、今に、日本にも起こりうるような、そういう方向が一つあるわけです。

二番目に私が考えますことは、新しい教育可能性の開発によって、今、教育の場に要求されている教育の高度化という使命をなるとか成し遂げようという動きがあるのではないかと思えます。その中では幼児教育は非常に大きな可能性をもってとりあげられる運命にあるのではないかと私には思われます。企業内教育とか職場教育とかいう新しい形の教育の場は、ぞくぞく開かれているのは事実ですが、こういうものは、なんととっても、補足的な役割しか果たさないわけです。それよりすべての人におこなわれる教育の場において、今のような教育の高度化という要求が成し遂げられれば一番正しい正当な解決法であります。そういう意味では、幼児教育は、おそらく、最も大きな、最も未知の可能性を秘めているだろうと私は考えるわけです。

これは、後でいろいろと触れますけれど、たとえば、一つの例

を上げますと、時実先生や、その他の大脳生理学者の意見によれば、人間の脳細胞の数は、生まれた時に決まっております、百四十億あるそうです。そして最終的に、人間はその数のどれ位を使っているかと言いますと、おそらく三分の一か、四分の一しか使っていないのではないかという意見があります。もしも、欲張って、その脳細胞をすべてうまく使うことが可能となりましたら、われわれの考えているような人間の能力というものをもつとはるかに越えた、もつとすばらしい能力をもつた人間ができあがるかもしれないと考えられるわけです。

確かに、事実、創造的な人間といわれるような人々を考えてみますと、そういう人の中には、非常に豊富な多様な、さまざまな人間的な関心なり、知識があったということは事実であるように思います。

たとえば、進化論をつくりだしたダーウィンというような例を考えてみますと、案外知られてないことですが、ダーウィンは本当は牧師さんになるつもりだったわけですが、見習牧師の修業をしようとした時に、例のビーグル号の航海に誘われて、南米各地を歩き、古生物学的資料をたくさん集めて、動物というものは、だんだん一つの方向に進んでいったのではないかという考えを持つようになりませう。

たとえば、非常に古い形の象はたいへん小さいものなのですけれど、年代がたつにつれてどんどん大きな象に変わっていくとい

うように、進化というものは一定の方向性をもっているという考えは非常にやくからダーウィンの中に根差してしまいましたが、彼は十数年間、そういう資料を暖めていて発表しようとしなかったわけです。なぜ、発表しなかったかといえますと、そういう進化という事実を統一的に説明できる原理がみつかるまで、非常に慎重に待っていたということらしいのです。

何が、その起源を与えたかといえますと、実は、生物学などの研究ではなくて、ダーウィンがたまたま経済学の本の中にマルサスの人口論をみつけて、この中で、自然淘汰という考え方にぶつかるわけです。つまり、優秀な人間は生き残り、劣等な人間は駆逐されるというマルサスの意見を読みまして、ダーウィンは、はじめ、進化論を支える原理を発見したと考えました。

自然淘汰というものが、そういう優れた生物を育て、生き残らせ、一定の方向に生物を進化させる原理であると思ひだして、はじめに進化論を発表するようになるわけです。

こういう、今の経路を考えてみますと、ダーウィンという人の中には、非常にたくさんの方に豊富な関心があるということがわかると思います。宗教的な関心はあるわけですが、ダーウィンは生物学にも素人ではあっても、宗教学に劣らない強い関心をもち、それから、経済学にも強い関心をもっていたのです。こういうふうな、一見、意想外と思われる結びつきがなかったら、おそらく進化論という考えは生まれなかったらうと思ひます。

多分、コンピューターの働きと人間の頭の働きとが非常に違う理由はその辺にあるのでありまして、コンピューターは人間が外から何かを与えてやる他しようがないわけですから、コンピューターの中に、生物学と宗教学と経済学に関する知識を詰め込んでみようと思っても、これはなかなかできないわけでありまして、またそういう組み合わせ以外の組み合わせから、全く新しい別の創造的な才能が生まれるという可能性が人間にはあるわけです。いわば人間のつくりだすものは、どういうところからくるかは、そう簡単に予見はできないけれども、コンピューターの場合には完全に外側からわかるという形でないと、何にも与えることはできないわけです。おそらく、基本的に変わっている点は、その辺にあるのではないかと私たちは思うわけです。

こういう人間的な関心を豊富に発展させる時期として幼児期というものが、あるいは一番大切な時期ではないかと思っているわけです。そこに非常に大切なしっかりした土台というものがいくつか築かれれば、おそらく、外側から無理矢理教えなくても、そういうものが自然であるかのごとく、いろいろな方向に、それぞれ、伸び育っていくという可能性、いつか、実を結ぶのではないかと考えられるわけでありまして。これは、おとなというものには、利害関係というものが主になっていて、そういうものに基づいてしか、何かを学んだり、勉強したりしようとしらないものですが、多くの日常のおとなの行動というものを考えてみれば、利

害のようなものに、一番左右されやすいということは、事実であります。そして、今すぐ自分の役に立ったり、お金もうけにしなければいけないということは、ごく普通ですけれど、これだけでは困るというのが私の考えです。

つまり、何かをすることがうれしいから、それをするのが、唯、うれしいから、他に報酬を求めないで何かを学びとったり、何かをやりたいという気持が、人間にとって一番大切なような気もするのですけれども、それは利害関係への関心の非常にうすい幼児期に、一番つくられやすいのではないかと考えられます。

それには、偶然というものもあるのでしょうかけれども、たとえば、生化学者で世界的な業績をあげている江波不二夫先生の話を知ったことがあるのですけれども、生化学を自分がやるようになったのは、小さい時に犬に噛みつかれて狂犬病の予防注射をされたから、そういうことに興味をもったのだと言われておりまして、案外、そういう偶然な事件も小さい時であれば、何か人間の一生を左右するものになりかねないと私たちは考えるわけです。

最近の発達心理学の動向

ここまでは、前置きでしたが、それでは、発達心理学というものが、それに対してどんな寄与をなしているかということですが、二番目に発達心理学の考え方の変化、あるいは、最近の発達心理

学の動向について、少しお話ししたいと思います。

今、最初に申し上げましたような、教育の高度化という社会的な情勢の変化に伴いまして、発達心理学も世界各国で急激な変化をとげつつあるようです。

これは、私たちが考えても、非常に意外だと思う位、ここ十年間位の間に、非常に目覚ましく変わったわけであり、最初に述べましたように、発達心理学などは、心理学の本道にとつては、脇道だと思われていたのが、わずか、十年かそこら前の話にすぎないと思うのですが、現在では、むしろ、発達心理学は、心理学の一番中心的な本道だという考え方が芽生えてきている位です。そういう動向の変化がどういう点に現われているかということですが、いくつかに、分けて、それを述べていきたいと思います。

一、教育が発達におよぼす影響の重視

まず、第一に、古い発達心理学の傾向では、これも最初に述べましたように、いわば、成熟とか、遺伝とかいうことが非常に大事だと考えられておりまして、人間の子どもの生長というのは、木や草のように自然に手をかけなくてもどんどん伸び育っていくものだと、無理をしないで教育する方が大事だという考え方が強かったと思うのですが、ここ五、六年の間にちょうど反対の考え方がだんだんできてきたように思います。つまり、人間

の生長のためには、学習とか環境とか、子どもをとりまいている文化、社会の影響が非常に大きいのであって、特に教育の影響は無視できないという考え方がだんだん強くなってきたように思います。

皆さまよくご存知のように、フランスの心理学者、ピアジェはこういうことを主張しておりますし、ソ連の心理学者も同じであります。あるいは、アメリカでも、日本でも同じような考え方もつ心理学者が、どんどん増えております。

昨年、現在のアメリカで代表的な発達心理学者の一人であるブルナーが「教授理論の建設」という本を書きまして、その中で、非常におもしろいことを述べています。子どもの成長のためには、教授の理論とか、知識や思考についての理論が非常に大切で、これらを無視して発達をあつかうことは、できないと言っています。たまたま、ちょうど同じ時期に、ソ連のレオンチュエフという心理学者が、認識の心理学という本を書きまして、それを読んで、ブルナーの本と同じようなことを、ほとんど同じような言葉で述べている箇所がありまして、非常に私は興味をもったわけです。その後でまた波多野完治先生が心理学と教育実践という本をおだしになり、それを読みますと、また同じようなことを書いてあるのがわかりました。

別に、三人が相談して書いたわけではないのですが、期せずして、同じような表現が世界各国の心理学者の中からでてくる

というところが非常に注目される場所ではないでしょうか。

その意味で必ずしもそれが現在の主流とは言えませんが、これから支配的になりつつある傾向だと考えられるかもしれません。

二、発達のプロセスやメカニズムに関する研究の進歩

二番目に、こういう変化に伴って、発達のプロセスとかメカニズム、つまり発達はどういうふうに進捗するのか、それはどういう条件、原因に支えられているのかについて、細かい分析が非常に進んできたことを申し上げたいと思います。

そして、今まで、なぜ子どもは木や草と同じように自然に育つと思われていたかということがだんだん明らかになってきたわけでありまして、考えようによっては、木や草も別に自然に育つものではなくて、やはり日光や水や肥料とかいろいろなもの影響をうけて育つのですが、われわれが外に自然に育っている木を見る時には、そういう木の生長を支えている原因とか条件とかは、つい、うっかり見すごしがちです。なんにもしなくても、木や草は育つと思いがちなのです。

子どもの発達についてもやはり同じことが言えると思います。つまり、私たちはこういうふうな子どもを育てようとは思っていないのですけれど、思っていないで何か手をかけているわけで、それが子どもの成長に何か非常に大きな影響を及ぼしている

ということが、だんだんわかってまいりました。

たとえば、ホスピタリズムというものが、施設病と訳されておりますが、乳児院や保育園のような施設にいる乳児の発達や成長が非常に遅れる現象をさしております。あるいは、初めは死亡率が非常に高いことから、注目されるようになったわけですし、ひどい時には、七十パーセントから八十パーセントもの施設の子どもたちが死んでしまうという高い死亡率が一時、欧米の乳児院で示されたことがあったわけですね。

この原因というのは、いろいろな追求されて、医学的看護が十分でないためなんだろうといわれたわけなのですけれども、いくら医学的設備を完全にしても、それを防ぐことができないということがわかってまいりました。意外なことには、ホスピタリズム、子どもの死亡率の高さや、発達の遅滞を起こす原因は、実際は、親身の保育者みたいな人間がいらない（親子関係という名で呼んでいる場合が最近が多いわけですね）子どもを育てる親身な母親または母代りの人がいないということが、非常に大きな原因であることが、やっとわかってまいりました。

たとえば、非常に有名な研究は、アメリカのスピッツの研究でして、彼は子どもたちを三つのグループに分けて、その子どもたちの発達をどんどん追跡したわけですね。

第一のグループは、普通の家庭児を百人、第二のグループは、非常に医学的に完備した乳児院の子どもを百人とります。ただ

し、この乳児院では、子どもの養育にあたる看護婦さんは子ども十人に一人の割合ぐらいしかいない。

第三のグループでは、医学的設備は、非常に悪いのでありまして、女囚を収容している刑務所付属の乳児院なのですが、ここでは母親が自分の子どもをみているわけです。たまたま孤児になった場合、人の子どもを預かることはあるが、だいたい、平均して母親一人が自分の子ども二人をみるのできる乳児院でした。

ここで育ったそれぞれ百人の子どもたちを何年か追跡したところ、驚くべきことに、第一のグループは、もちろんすくすく育ったのですけれども、第二群の子どもたちは非常に死亡率が高くて発達が遅れていました。そして、第三群の物質的にも社会的にも非常によくないと思われていた乳児院の百人も普通の家庭児と同じように、大変健全に育ったということがわかりました。結局、最大の原因は物質的設備でも、医学的看護でもなくて、子どもに対する親身な養育の程度に帰着するのであらうということが、だんだんわかってきたわけです。この発達遅滞というものは非常に著しく、だいたい五歳までに残った子どもは二十人以下だけであり、その子どもたちの発達は非常に遅れていて、言葉を一語か二語しかしゃべれないほどでした。スプーンを使って食事を取ることや、衣服を着たり脱いだりすることもできないわけです。

こんな状態に子どもがなってしまったことは、非常に不幸なことでありますが、その原因が、意外に、母親が子どもにも与える

世話の程度にあったわけですから、なかなか気づかれなかったわけです。

母親が、まさにこういうことをやらなければ、子どもは育たないので、一生懸命義務的に育てているのであったら、すぐ気づかれたと思うのですけれど、そうではなく、母親はごく普通の自然のこととしてやっていたために、それが気づかれなかったと言えます。

そして、何故ホスピタリズムが起るのかということが、細かいメカニズムの分析によって、わかってきたわけですが、一つの例はアメリカのウィスコンシン大学のハーローによっておこなわれた猿についての非常におもしろい研究です。

猿を離乳した直後に二つの仮親につけるわけです。一つは針金製のかごに哺乳びんがつけてあり、片方には哺乳びんがないけれども骨組を手ざわりのいいフェルトでおおってある仮親を使うわけです。我々の常識では針金の方が乳を出してくれるのだから、針金の方に猿がなつくと思われれますが、事実は全く逆でした。猿の子どもは、次第にフェルトの母親の方にしがみつくことが多くなり、それだけであつたなら、手触りのいいほうが好きだからしがみついているとみるのですが、どうも、それだけではないらしいのです。たとえば、猿の嫌いなへびやねずみをおりの中に入れて、猿の子どもは、針金の母親がいても非常に恐がってなきわめいてすくんでしまうのです。ちょうどホスピタリズムの子ども

と同じように床にうずくまってしまい、ただ体を左右にゆるする運動をしたのですが、フェルトの母親の場合には、猿の子どもは恐いものが近づいても、すぐに母親にしがみつけば、恐がらないように見えたわけです。

もう一つのおもしろい例は、ハーローが何か月か後にフェルトの母親に顔を描いてやったところ、猿はどうしても顔の描いてある方にはしがみつこうとせず、無理にしがみつかせようとすると、わざわざ反対のほうに向きをかえて、顔の描いてない背なかの方にしがみつこうとすることがわかりました。

猿と人間を比較してみると、こういう行動は大変人間的なニュアンスを残しており、ただ乳をだすとか世話をしてくれるとかいう功利的動機だけで、子どもは母親になつくのではないということを我々に想像させます。もともとと深い、いろいろな要素が親子関係の中に入っていると考えられます。

次に好奇心について別の例をあげますが、好奇心は子どもの知的成長のために非常に大切だと考えられており、今までの心理学では好奇心は自然に子どもの中に育つものであり、外側からはどうすることもできないという考え方が強かったのですが、だんだんそうではないだろうという考え方ができました。たとえば、カナダの発達心理学者のヘップは、好奇心は非常に見慣れたものからほんのわずか違うものに対して起こり、非常に見慣れたものから非常に違うものに対しては我々は恐怖をもつという考え方を

述べています。

こういうふうになると、お医者さんの家庭から、よくお医者さんがでるということは、今までの常識では、遺伝的に医学を学ぶ才能があるとか、お医者さんは儲かるからお医者さんになるのだらうという考えが強かったわけですが、そうではないと考えられるわけです。普通のサラリーマンの家庭では、父親がどんなことをやっているかを具体的に見ることはないのです、子どもは父親と見ている存在だというふうに思っているわけですが、お医者さんとか、音楽家、画家という職業の場合には、家庭で父親はさまざまな具体的な仕事をしているわけだから、父親の仕事の内容はだんだん子どもにわかってくるわけです。それが見慣れたものになり、たとえば、「人間の命を救うという社会的使命とはどういうことか」とか、「生物についてのいろいろなことを学ぶということか」とか、「動物についてのいろいろなことを学ぶということか」とか、「どういふことか」とか、という方向に自然に子どもの関心が発達してくると考えられます。これは、一旦はずみがつけば、今の考え方を応用すれば、どんどん伸びていくわけです。

児童相談をしていると、よく家の子どもはちらかしてばかりいて困るという相談があるのですが、私はその時、「それでは、お宅ではお父さん、お母さんがよく片付けをなさいますか」と聞くことにしています。そうすると、「私は、まあ、片付けるのですが、主人の方が会社から帰ると洋服を一つずつ取り出しながら歩

いているのです」というような例をお話しになるお母さんがいます。その子どもにとっては、乱雑にしているところを見慣れているのだから、乱雑にしているのが普通で、きちんとしている世界は逆に気持ちのわるい世界になっていることがわかります。

そこで、私は、「子どもをなおしたいなら、まず、ご主人をなおさない」と、いうわけですが、たいていのお母さんは、「それは、どうもできません」という答えをします。「それなら、無理に子どもだけをなおそうとせず、こせこせ育てないのもよいことだと思えば、それもよいじゃありませんか」といいますと、たいていのお母さん方は不平そうな顔をなさいますが、私たち心理学者が教えることのできることに反対の条件がそろっているのですからどうにもなりません。

今まで、いろいろな例をあげましたように、自然の成長というもの、どういう条件や原因によって支えられているのかの分析が進んできたわけです。特に大事なことは、社会的学習という考え方で、子どもというものは、母親、父親、先生など、自分の規範となるような人物の行動を、いつのまにか、学習するものだという考え方です。先生方の日常の行動は、教えようと思わなくても、いつのまにか、子どもたちにしみこんでいっているという考え方が強くなっています。

三、初期学習の重視

三番目に、発達心理学の傾向の変化として、初期学習の重視があげられます。フロイドの精神分析では五歳までに人間の性格の基礎ができあがるという考え方をしていますが、この考え方ももう少し広がったものです。つまり、同じことを学ぶのに、おとなになってから学ぶのと発達の初期において学ぶのでは学び方の質が違うという考え方がだんだん強くなったわけです。それを私たちは初期学習と呼んでいます。ホスピタリズムの例を書きましたように、初期における母親、あるいは保育者などによるまわりからのいろいろな働きかけが欠如したために起きた障害は、それを後になって回復させることが非常にむずかしくなります。ホスピタリズムの子どもは非常に言語発達が遅れるのですが、これを回復させようという実験は世界各国の心理学者がやっていますが、大変な苦勞と、大変な手数をかけても、完全になおすことはなかなかむずかしいのです。

言語を学ぶことは、人生のいつに学んでもよきそうに思えますが、必ずしもそうではなく、ある時期に学ぶということが必要であり、その時期をはずしてしまうと、同じことを同じように教えるても非常に効果が悪くなってしまうのです。

言語の発達以外にもいろいろな例がありますが、ハーローの実験でフェルトの母親について育った猿においては、おとなになっ

でも正常な性的行動をおこなうことができないことが発見されました。なぜそうなったかという原因は、まだわかっていないのですが、この性的に異常な猿は後で、欠陥をとりかえずことはできませんでした。猿の母親が、おそらく子どもに与えているしつけというようなものが、猿の中に案外大事ないろいろなものを育てているのだらうと思います。ですからフェルトの母親も残念ながら十分な母親にはなれなかったわけです。

このように、いろいろな方面にわたって、初期の学習が非常に大切であり、時期をはずすことは非常に危険な結果を後に残しかねないという事実がたくさん知られてきました。もちろん、これを絶対的と考えてはならないので、フロイドの宿命論には、あまり賛成できませんが、私たちがなんとかして障害をなおそうとして、非常な努力と手間をかけ、専門的教育を与えても、なかなか元のようにもどしえないことが多いのです。

四、知的学習の重視

四番目に、知的学習というものが、だんだん発達心理学の中で重視されるようになってきたことをあげようと思います。今まで、非常に小さい子どもは何もわからないから、知的なことを教えても何の役にもたつまいと考えられてきましたが、だんだんそうではないという考えが強くなってきました。どんな小さな段階

でも、それなりにいろいろなことを考えたり学んだりするのであって、幼児の場合もそれを無視することはできないという考えです。今まで、幼児期は性格形成や社会性を養う上で重要だと考えられてきましたが、現代の心理学者は、その他に、知的な学習も幼児期には大切だと考えるようになっていきます。

たとえば、アメリカのブルナーたちがアフリカのコンゴでやったおもしろい実験があります。未開地で、昔ながらの原始林に住んでいて学校へ行かない原住民の子どもと、原始林に住んでいるけれど学校へ行っている子どもと、それから都会に住んで学校へ行っている原住民の子どもとの三つのグループについて比較研究がおこなわれました。

そして、原始林に住んで学校に行かない子どもの中には非常に原始的な思考様式が、そのまま残っていることがわかりました。実験者がびんからコップに水を移し、「コップの水の丈が高くなったのはなぜか」と聞くと、「実験者が魔術をつかったから」と答えるのです。このように原始的思考様式を、原始林に住んでも学校に行っている子どもたちは、都会に住んでいる子どもたちと同じようにもっていませんでした。

ここでわかることは、そういうアフリカの子どももっている未開の原始的思考様式というものは、学校に子どもたちを入れて、一定の知的学習のかまえを植えつけることによって、比較的簡単に、克服することができるということです。しかも、学校へ

行けばどんどん知的な成長が高まっていくというデータと、学校に行かない子どもたちは、七、八歳で知的な伸びはとまってしまい、何歳になっても、ある一定の原始的思考の段階にとどまっているというデータも得られました。そういうことを考えますと、やはり、七、八歳以前に学校教育を受けることが幼稚な思考様式を克服するために非常に大切だということができます。

ブルナーという人は非常に大胆な提言をしています。それは、どんな発達段階のどんな子どもに対しても知的な素材をその本質をくずさずに教えることができるということです。それに基づいて、ブルナーは代数の計算のようなものを小学校に入ったらばかりの子に図に書くような教え方をつかっている程度成功したと報告しています。

そのように、どんな段階にも教育の可能性があるとというブルナーのいい方を無制限に拡張してよいものかどうか私には非常に疑問があるのですが、今までの考え方と反対であるブルナーの考え方には注目すべきものがあると思います。ある成長段階まできた時に、はじめて何かができるようになるということではなく、こちらからの働きかけというものは、もっと小さい年齢までいくらでも降ろしていけるといふ可能性を信じなければいけないというブルナーの信念は、教育者としては大切なものではないだろうかと思えます。

以上のような発達心理学の動向から、幼児教育はきわめて大切

な教育の場であると考えられてきます。特に、おとなになってからの、それ以後の学校教育の場よりも、もっと効率の高い、もっと意外な成果をあげられる場であるという考えがでてきます。幼児教育は学校教育と違って、発達の全分野にわたってさまざまな教育がおこなわれねばなりません。

幼児教育の現状と私の考え

しめくくりとして、幼児教育の現状について私の考えを述べたいと思います。知的な教育とは何かということに対する日本の幼児教育の考え方は誤っていたのではないかと私は思います。知的な認識とは何もむずかしいことを考えることではなく、人間的な、その子にとっての本当の意味での関心が正しく育つということが、まず何よりも大切な条件です。そのためには詰め込みではなく子どもが知らず知らず与えられている環境的条件の中から何かを自発的に受け取り、自発的に自分の中で何かを伸ばそうとする根を持っていくことが一番大切です。

好奇心、知的関心はどういうふうにして伸びるかということとは先ほど述べましたが、幼児の知的な成長にとって一番大事なことは、むずかしいことを教えることではなくて、幼児教育にあたる者、父親、母親、先生が人間的に豊かであり、正しいということが何より必要なことだと思います。ですから、子どもの教育の第

一步は親や先生の自己教育だと言えます。何も百点満点の親や先生になることではなく、たとえば、どこかに父親として、「あつ、父親も良いところをもっていなな」と子どもに思わせるものが、ひとつでもあればそれでいいのだからと思います。

こういうことが私の考えの基礎にあるわけなのですが、それからみて、今日の家庭では知的な教育というのが大変、間違つて考えられていて、今の私の考えとむしろ正反対のことが考えられている場合が多いようです。

ある時私に相談にきたお母さんは、うちの子どもは、知能検査の練習をさせてもちつともやらないで、家の雨どいに非常に興味をもちだして、しょっちゅう、雨どいというのは、どっからきて、どこへ行くのか、あれはどういうことをするんだとうるさくてしょうがないと話されました。私はその時、子どもが疑問をもつのは非常に良いことで大切なことだと思つてお話ししたのですが、よく我々は誤解して、疑問をもつことは子どもが何にも知らないからだと思いがちです。しかし、本当は、子どもは、あることを知り始めたから疑問をもつわけです。母親が子どもの疑問を適切につかまえて、適切なヒントを与えることが知的な教育であり、子どもが疑問をもつた時に、その疑問を大切に、押しつけるに教えたり、強制的に棒暗記させたりして、子どもにとつて、知識が負担にしかならないようにしてはなりません。

つまり、幼児の知的成長力にとって大事なことは、子どもの疑

問を踏台にして、そのわずか上であるような適切なヒントを与えてやることによって、子どものそれまでのさまざまな知識が、全く新しい認識をつくることができれば、おそらく子どもはものを学ぶおもしろさを覚えるわけです。そして、いちいち、おとなが教えてあげなくても、自発的にさまざまな疑問を自分で解こうという態度が子どもの中に育っていくのを期待することが、子どもの知的な成長のためには、一番大事であると私は考えます。

そこから見れば、雨どいについて興味をもつたということは大変よいことで、子どもが家の構造や雨どいの構造やはたらきについて考え、疑問をもち始めたと思われるのですから、知能検査の練習より、ずっと大切なことだと言えます。家の子どもは食事のしつけがよくできないから、幼稚園でそれをなおして欲しいという例がたくさんありますが、本末転倒もはなはだしいわけで、いたずらに、学校教育の先取りをしようとするよりも、こういうしつけとか人格形成が家庭教育では大切なことだと思えます。

このようなことを、私たちは、発達心理学をやりながら自然に考えるわけです。幼児は無限の可能性を秘めているのですから、これからの幼児教育は、あるいは最もやりがいのある未知の領域の探検という魅力を備えているのではないかと思えます。そういうことのために私たちの知識が現場の先生方に役立つものであれば非常に嬉しく思う次第です。

(お茶の水女子大学)

(幼稚園教育実習指導研究会での講演より)